

桐朋学園大学大学院 修士課程

# 修了演奏発表

<大学院修士課程2年>

弦楽器 (VI)

2019年1月22日(火) 11:00開演 (10:30開場)

桐朋学園大学 仙川キャンパス S333教室

【11時00分～】

寺内 詩織

共演者：小森谷 裕子

1. L.v.Beethoven:Sonata for Violin and Piano No.2 A major Op.12-2
2. F.Schubert:Sonata for Violin and Piano No.2 A minor D.385 Op.137-2
3. R.Schumann/F.Kreisler Fantasy Op.131

1. L. v. ベートーヴェン（1770～1827）は、ヴァイオリンとピアノのための作品を 13 曲書いている（Wo040, 41, 42 を含む）。ベートーヴェンは演奏家としては一般的に鍵盤奏者と認識されがちだが、弦楽器奏者の顔も持っていた。10 歳から宮廷ヴァイオリニストのフランツ・ゲオルグ・ロヴァンティニー（1757～1781）に、ロヴァンティニーの死後はフランツ・アントン・リース（1755～1846）にヴァイオリンとヴィオラの奏法を学び、18 歳の時には宮廷楽団オーケストラと国民劇場オーケストラのヴィオラ奏者に採用されている。さらに 1794 年には、イグナツ・シュパンツィヒ（1776～1830）からヴァイオリン奏法のレッスンを短期間ではあるが受けていた。

3 曲のソナタから成る作品 12 は、アントニオ・サリエリ（1750～1825）に献呈された。初版の表紙には「SONATA Per il o Clavicembalo o Forte-Piano con un Violino(ヴァイオリンを伴うクラヴィチェンバロ又はフォルテピアノのためのソナタ)」と記されており、いずれも W. A. モーツァルトのスタイルを踏襲した作品であると言える。

1797～98 年の間に作曲されたと考えられているが、自筆譜が失われているため成立年代ははっきりとしない。しかし、楽友協会に所蔵されている 1798 年 3 月 29 日の音楽会のプログラムには、ベートーヴェンが「伴奏付きのソナタ」を演奏したと記録されており、おそらく作品 12 のいずれかであると思われる。

ノッテボームによると、第 2 番のスケッチが、ピアノ・ソナタ作品 14 やピアノ協奏曲作品 19 のスケッチと同時期に書かれている。従って、第 2 番は 3 曲のうち最初に作曲されたと考えられるが、明確な証拠はないだろう。

急-緩-急の 3 楽章構成で、第 2 楽章は同主短調をとっている。

2. フランツ・シューベルト（1797～1828）は「歌曲の王」と呼ばれることがあるが、ベートーヴェンと同様にヴァイオリン奏者でもあった。6 歳の時、父フランツが校長を務めていた学校に入学し、アマチュア音楽家であった父からヴァイオリンを、兄イグナツからピアノを学んだ。11 歳で入学した宮廷寄宿制神学校では、他に学んでいたピアノ、歌唱、音楽理論よりもヴァイオリン演奏における成績が優秀であり、学内オーケストラで第 2 ヴァイオリン奏者を務めていた。

1816 年に作曲された 3 曲から成る短いソナタは、おそらく私的な音楽会用に書かれたと思われる。しかし、シューベルトの死後、アマチュアの演奏家が親しみやすいように「ソナチネ集」として出版された。

第 2 番は 4 楽章構成である。この曲の第 3 楽章・第 4 楽章の自筆譜は一部しか現存していないため、今日使用されている「原典版」は、1836 年にディアベリ社によって出版された初版に基づいている。

3. ロベルト・シューマン（1810～1856）は、1844 年 5 月 27 日にロンドンで行われた演奏会でベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲ニ長調作品 61 を共演したヨーゼフ・ヨアヒム（1831～1907）の才能に感銘を受け、1853 年にヴァイオリン協奏曲ニ短調と共に幻想曲作品 131 を作曲した。この曲も自身の指揮とヨアヒムの独奏で初演を行ったが、シューマンは致命的な病状にあり、この公演が彼の最後の舞台となった。

シューマンの死後、ヨアヒムにより改訂されたが、さらにウィーン出身のヴァイオリニストであるフリッツ・クライスラーが自身の演奏用に編曲をした。今日ではクライスラーの編曲版で演奏されることが多い。

J.S.Bach:Violin Sonata No.1 in G minor, BWV 1001 "fuga"

W.A.Mozart:Violin Concerto No.5 in A major, K.219 1st movement

C.Franck:Violin Sonata in A Major,FWV8

《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》BWV1001-1006 は現代のヴァイオリン奏者が必ず演奏するレパートリーであるが、1906年にヨーゼフ・ヨアヒムがJ. S. バッハの自筆譜を再発見するまでは、貴重な自筆譜は行方不明のままであり、その音楽はあまり知られていなかった。その後、時代と共に研究が進み、その奏法は日々変化してきた。

現在ではバロック時代の楽器・弓の研究も進み、モダン楽器で演奏する際にも、バロックのスタイルを取り入れて演奏するのが一般的となっている。

今回演奏する無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ（第1番）ト短調 BWV1001 Fuga は、バッハの3曲ある無伴奏ヴァイオリンのためのソナタのFugaの中で、唯一Allegroの指定がされている曲である。

主題は属音が4度反復される音型ではじまり、4度音程の中で奏でられるシンプルなものであるが、その主題を基にバッハの計算で組み上げられる音楽は、非常に立体的で壮大な多声音楽となっており、バッハの緻密さ、天才さを再認識させられる作品である。

バッハのフーガの特徴として、主題の対位旋律として音階が用いられる点があげられるが、この作品でもその特徴が見受けられる。

自筆譜は非常に綺麗に書かれているが、臨時記号の不明瞭な個所があり、現在出版されているベーレンライター版などでは

それらの点が現代の記譜法に従って訂正されている。また、本日の演奏はベーレンライター版の楽譜に基づき演奏する。

## モーツァルト

モーツァルトのヴァイオリン協奏曲は、1番を除く4曲がすべて1775年に作曲されており1775年は「ヴァイオリン協奏曲の年」とも言われている。

本日演奏する第5番は、第4番(ニ長調) K. 218 完成から2か月後の12月20日に完成しており、習作的な作品の第2番(ニ長調) K. 211 の完成からわずか半年で飛躍的な成長が見られ、一連の作品最後のものにふさわしく、堂々とした規模をもった作品である。

第3楽章ではタイトルの由来でもある「トルコ風」の異国情緒あふれる音楽が感じられる。18世紀のヨーロッパにとって、現在のトルコであるオスマン・トルコは脅威である一方、その文化は憧れの対象でもあり、モーツァルトもその影響を受けた一人であった。

本日の演奏では第1楽章のみの演奏となるが、第1楽章で場面変換の際に度々用いられる「コーダ音型」は第3楽章の「トルコ風」で作曲された中間部の音型・動機を先取しており、ここでも「トルコ風」を感じることができるだろう。

ヴァイオリン・ソロがAdagioで登場するというのが、この作品の特徴の一つである。

オーケストラで提示されてきた第一主題、第二主題、リトルネッロからは想像のつかない、歌曲的な美しい旋律が現れる。

この作品のような、オーケストラの前奏の後にAdagioを挟むモーツァルトのヴァイオリン作品は無く、彼にとっての一つの挑戦であったであろう。

Adagio の後は快活なヴァイオリン・ソロが奏でられるが、オーケストラの伴奏部分は第一主題がヴァイオリン・ソロの対位声部として用いられるという面白い試みがされている。

モーツァルトにとってのヴァイオリン協奏曲の集大成として作曲された、この作品の様々なしかけを楽しみながらお聴き下さい。

## フランク

フランクのヴァイオリンソナタといえば、ヴァイオリンソナタの名曲として数多くのヴァイオリニストにより演奏されてきた作品である。イザイに献呈されたことは有名で、63歳ではじめてソナタを作曲したフランクは、イザイへの結婚祝いとしてこの作品を献呈した。イザイがこの作品を献呈された際のスピーチとして「これは私だけのものではありません。全世界への贈り物です。私の役目は全身全霊をささげ、この曲のすばらしさを伝えることです。」

と語り、その言葉通り生涯世界中でこの曲の演奏を続けた。

フランクというと「循環形式」という作曲形式を用いる作曲家として有名だが、この作品でも一つの動機が複数の楽章において現れる「循環形式」を用いて作曲された。

### 第1楽章：Allegretto ben moderato 8分の9拍子 イ長調

展開部のないソナタ形式によっており、属九の和音による開始される。イ長調ではあるが、その調性はふわふわとしており、イ長調の大カデンツが登場する曲の終わり近くではじめてイ長調と気付くかされる。幻想的な曲想の楽章である。

### 第2楽章：Allegro 4分の4拍子 ニ短調

ソナタ形式。

第1楽章の幻想的な雰囲気とは打って変わり、情熱的なピアノの序奏からはじまる。曲を通して情熱的な曲想であるが、時折登場する弱奏でのヴァイオリンの旋律が美しい。

### 第3楽章：Recitativo-Fantasia (ben moderato) 2分の2拍子

「幻想的な叙唱」と題された自由な形式による楽章。レチタティーボとファンタジアという2つの部分で構成されている。

ファンタジアの部分では2楽章の第1主題の激しい旋律を、瞑想的に変化させ美しく奏でられる。

### 第4楽章：Allegretto poco mosso 2分の2拍子 イ長調

ヴァイオリンとピアノのカノン風の楽想による自由なソナタ形式。この楽章の第2主題は第3楽章で揭示された旋律がそのまま用いられている。曲のフィナーレに相応しく、華々しく輝かしい楽章である。

Johannes Brahms : Scherzo in c moll aus der F.A.E. Sonate für Violine und Klavier

Ernest Chausson : Poème pour violon et orchestre Op.25

César Franck : Sonata pour piano et violon en La majeur

ヨハネス・ブラームスはヴァイオリンソナタを3曲残しており何れも名曲として知られているが、もう一つ特殊な経緯で作曲したソナタが存在する。それが「F. A. E. ソナタ」と呼ばれるもので、彼がシューマンと出会って間も無くの1853年秋に作曲された。

この作品は、ヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒムがシューマンを訪れる事になった際、シューマンとシューマンの門下生のアルベルト・ディートリヒ、そしてブラームスの3人がヨアヒムを歓迎する為に共同で作曲したもの。第1楽章をディートリヒ、第3楽章をブラームス、第2、4楽章をシューマンが担当し、シューマンの家でブラームスとヨアヒムによって初演された。

F. A. E. ソナタと呼ばれる由来は、ヨアヒムのモットー「Frei aber einsam(自由にしかし孤独に)」の各単語のイニシャルを音名にしたF-A-Eという動機が各楽章の基本的な構成要素となっており、全曲に統一感を与えているからである。

ブラームスの作曲した第3楽章は3部形式で、第1部はベートーヴェンの交響曲第5番の冒頭と同じハ短調の同音連打「運命の動機」による主題で始まる。この動機は様々な表情で至る所に現れる。

中間部のトリオは場面が変わり穏やかな曲調だが途中ピアノに「運命の動機」が潜んでおり、それが第3部として再現される為の糸口となっている。最後は中間部の旋律より導かれたコーダで華々しく終わる。この第3楽章では他の楽章と比べてモチーフがはっきりとは現れておらず、調性もハ短調な為当てはまらない。これは、全楽章にモチーフを用いて単調になる事を恐れたブラームスなりの工夫ではないかとみられ、彼はこの楽章をコントラストのはっきりとした曲調にした上で、副主題や中間部の旋律にモチーフの変形を登場させている。また、この副主題はディートリヒ作の第1楽章に出てくる旋律の引用であり、巧みに統一感を出している。

エルネスト・ショーソンは1855年にフランスで生まれた作曲家で、セザール・フランクの弟子「フランキスト」として有名。

幼少期より音楽のみならず文学、美術にも才能を発揮したショーソンが本格的に作曲の勉強を開始したのは、23歳の時。マスネやフランクの元で学び、遅咲きながらも急成長を見せて評価された。

今回演奏する「ヴァイオリンと管弦楽の為の『詩曲』」は、彼が若くして自転車事故死する3年前の1896年に作曲された。

実は、この作品の題材は読書の最中に見出されたと言われている。自筆の楽譜に彼の筆跡で「勝ち誇る愛の歌(Le Chant de l'Amour Triomphant)」とあり、これは彼が熱心に愛読していた、ロシアの文豪イワン・ツルゲーネフの非常に珍しい小説の題名である。物語は、音楽を得意とする男性ムツィオと絵を得意とする男性ファビオという友人関係にある二人が、一人の美しい女性ヴァレリアに恋をした事で始まり、壮絶な展開を見せる。

ところでこの小説に登場する二人の男性と同じく、偶然にもショーソン自身、音楽と美術に天分をもっているという共通点がある。つまり「詩曲」という作品は、子供の頃から文学、音楽、美術に影響を受けてきた彼だからこそ作り得たものといえるのではないだろうか。

こうして創り出されたこの曲は、オーケストラによって重苦しく始まり、その前奏から引き摺り出されるようにヴァイオリンの独奏が現れる。それが少しずつ緊張感を増していき、仄暗く熱い情熱に満ちた壮大なストーリーへと展開していく。激しい嵐が去った後、小鳥が澄んださえずりを再開させるかのように、ヴァイオリンがE線の高みから心を和ませるようなトリルを降らせて静かに終結を迎える。

セザール・フランクは1822年にベルギーで生まれ、後にフランスに帰化した作曲家。一流オルガニストとしても活躍した。

彼の音楽は近代フランス音楽の作曲家達に影響を与えており、フランクに尊敬の念を抱く弟子等による「フランキスト(フランク派)」と、ドビュッシー率いる印象主義音楽派の対岸関係がうまれた。

今回演奏するのは、晩年、作曲活動の波に乗っていた頃の1886年に生み出された彼の唯一のヴァイオリンソナタである。この傑作は、ベルギー人の友人ヴァイオリニスト、ウジェーヌ・イザイの結婚祝いとして捧げられている。

このソナタは、循環形式と呼ばれる一つのモチーフが複数の楽章において現れるという独特の手法で構成されている。また、バッハやベートーヴェン、ブラームス等の音楽に憧れていたフランクらしく、カノンや対位法といった古典的な手法の美しさも際立つ。そして、このソナタはこれだけ鮮やかな印象を持ちながらも、実はヴァイオリンパートは第2楽章の終わりの和音以外、単音で書かれている。シンプルでありながら、彩り豊かに魅せるところもフランクの音楽の特徴の一つではないだろうか。

第1楽章は、目を瞑ると穏やかな自然の中に佇んでいるような情景が浮かぶ美しい音楽。

第2楽章では、鮮やかなピアノの пассаージュとヴァイオリンによる緊迫感溢れる旋律が特徴的。

第3楽章は、ヴァイオリンの印象的なレチタティーヴォで始まり、心の奥底に響くような祈りの音楽へと続く。

終楽章ではこれまでの不安要素が一掃され、幸福感に満ち溢れたピアノとヴァイオリンの掛け合い(カノン)で始まる。至る所でこれまでの各楽章の旋律が鮮やかに変奏され、やがて華麗なフィナーレへと昇華していく。

## Stravinsky : Suite Italienne

## Beethoven : Violin sonata No.9 in A Op.47 'Kreutzer'

◎イーゴリ・ストラヴィンスキー Igor Stravinsky (1882-1971)

Suite Italienne イタリア組曲

原曲は、1919年にストラヴィンスキーによって作曲されたバレエ組曲「プルチネラ」である。ストラヴィンスキーの友人のヴァイオリニスト、サミュエル・ドゥシュキンが共同で1933年頃ヴァイオリンとピアノのためにこの作品を〈イタリア組曲〉として編曲した。

小編成で古典的なスタイルを取りながら、ストラヴィンスキーらしい近代的なリズムや和声感、色彩感あふれる独創的な作品と言われている。

序奏、セレナータ、タランテラ、ガヴォットと2つのバリエーション、スケルツィーノ、メヌエットとフィナーレの6つの曲で構成されている。

## I. Introduzione 序曲

Allegro moderato 4分の4拍子でト長調を基調とする明るく弾んだ曲。

## II. Serenata セレナータ

Larghetto 8分の12拍子。中間部のピッツィカートの効果的である。

## III. Tarantella タランテラ

Vivace めまぐるしく動く旋律により、ストラヴィンスキーらしいリズムの妙も感じられる曲。

## IV. Gavotta con due Variazioni 2つの変奏付きガヴォット

原曲では木管のみで演奏される。Variazione1 Allegretto、Variazione2 piu tosto moderato

## V. Scherzino スケルツィーノ

Presto alla breve 軽快に走り抜ける8分音符の連続である。

## VI. Minuetto e Finale メヌエット・エ・フィナーレ

Moderato-Molto vivace 優雅なメヌエットに漂う不穏さも丸ごと楽しむのがよろしい。フィナーレの美しさはヴァイオリンでこそ、と思わせる説得力がある

◎ルートヴィッヒ・ヴァン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827)

ヴァイオリンソナタ 第9番 クロイツェル

作曲は1803年、初演は1803年5月24日（17日説もある）ベートーヴェンにとって初めてピアノとヴァイオリンの二つの楽器によるアンサンブルにおいて両者の主従関係を完全に克服し、対等の関係をもつジャンルにした。それを物語っているのが、ベートーヴェン自身が出版の際に扉に書いた記述である。これには「ほとんど協奏曲のように、きわめて協奏的スタイルで書かれたヴァイオリン助奏付きのピアノソナタ」と記されている。この曲は貴族の館での演奏ではなく、名ヴァイオリン奏者が優れた腕前を持つピアニストと一緒に、演奏会場で一般の聴衆に聴かせるために作られた。そのため、この作品に示された超絶技巧には前提となる演奏家、当時イギリスのヴァイオリニスト、ブリッジタワーの存在があった。しかし、初演ののち2人は不仲になり、この曲の献帝者を当時フランスで著名であったクロイツェルに変えたという。これが「クロイツェルソナタ」の由来である。ただし、クロイツェルがこの曲を演奏することはおろか理解を示すこともなかったと言われている。

## ○一楽章 Adagio sostenuto-Presto

この楽章の主調であるイ短調に対して同名長調のイ長調で始まり、ヴァイオリンの無伴奏による重音奏法を使って序奏が4小節間弾かれる。599小節という巨大なソナタ形式。

## ○二楽章 Andante con Variazioni

へ長調の主題と四つの変奏とコーダから成る。ベートーヴェンが最も得意とする変奏曲形式。

### \*第一変奏

主題旋律はピアノの右手、16分音符の3連音符に組み込まれている。ヴァイオリンは高音域で小鳥のようなイメージで作られている。

### \*第二変奏

第二変奏の一番の特徴としてはヴァイオリンの高い音域であり、F音まで到達する。音色の変化ではなく、音域を極度に拡大する手法もまた、中期のベートーヴェン特有のものである。

### \*第三変奏

主題旋律は16分音符の動きの中に隠れ、ピアノとヴァイオリンがユニゾンになったり、半進行になったりと連動することにより、効果が表れている。

### \*第四変奏

再びへ長調に戻る。ヴァイオリンのピッチカート奏法が特徴であり、ピアノの細かい旋律と調和している。

## ○三楽章 Presto

この楽章は元々、作品30-1のために1802年5月以前に書かれたものであった。しかし同曲の他の楽章とのバランスからこの音楽は使われなかった。

第二楽章の「静」を打ち破るかの様に冒頭にピアノがffでのイ長調の主和音がかかる。フェルマータを経て、ヴァイオリンが6/8拍子のリズムを始める。

三楽章を通して、「動」「静」「動」が効果的に表現されている。

<ご来場の際のお願い>

音楽部門の警備室にて、お名前を確認できるものをご提示頂きます。

ご提示のない場合や定員を超過した場合は入場をご遠慮頂く場合もございます。

<試験のため、以下の諸点についてご注意ください<お願いいたします>

(1) 写真・ビデオ等の撮影・花束贈呈・演奏中の入・退場

はご遠慮ください。

※演奏者交代時等演奏の合間の入・退場は係員の指示に従ってください。

(2) 小学生低学年以下のお子様の入場はご遠慮ください。

(3) 会場内では携帯電話およびアラーム時計等の電源をお切りください。

(4) 採点員席への立ち入りは固くお断りします。

### \*今後の修了演奏発表日程\*

1月23日(水) 9:30～ 調布キャンパス C008・C001 教室

1月24日(木) 14:00～ 調布キャンパス C008 教室

1月26日(土) 13:00～ 調布キャンパス C008 教室

\*曲目等詳しいご案内は こちらまで\*

<http://www.tohomusic.ac.jp/college/graduate/concert.html>

—ご来場をお待ちしております—

桐朋学園大学大学院

電話 042-444-7055 (調布キャンパス代表)

FAX 042-444-7056